アンノウン・ワールド

麒麟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アンノウン・ワールド

【Ｎコード】
Ｎ２５８７Ｘ

【作者名】
麒麟

【あらすじ】
日常からの脱出を望む白刃が深夜に出会った電波さんに突然「私は神だ」と言われ突然異世界につれていかれていろいろやる話です
最強チート主人公ものです苦手な方はお控えください
処女作ですので指摘、感想などがありましたらお手柔らかにお願いします
＊今後色々な要素が加わる可能性があります

第1話　自己紹介

俺の名前は黒宮白刃（クロミヤ シラハ）１７歳
ただの高校生だ
成績はそこそこ
スポーツはどちらかといえば優秀
顔は中の上と自己診断している
部活は剣道部
理由は叔父が道場をやっているからである

さて次は俺の日常について話そう
それはただただ暇な生活だ
両親はおらず叔父の家に住んでいる

そんな俺でも中学の時から思っていることがある
それは・・・・日常からの脱出だ
周りから見れば厨二病の診断をされる
だが俺は思っていた
「そんなもののなにが悪い！人にはそれぞろ個性があるんだよ！」

っと話がずれたなともかく俺は日常からの脱出を望んでいる

第1話　自己紹介（後書き）

次からはもう少し
長くなると思います

第2話　死亡フラグ

ただいまの時刻は午前2時です
季節は2月です
気温はマイナス2℃です
＝死にますね
場所は公園
なぜこんなところにいるのかと言うと・・・鍵をなくしたからである
叔父は今出かけていて家にいない
＝やっぱり・・・死にますね
記憶を読み返して公園まできたのわいいが肝心の鍵がない
この状態を打開するには
一刻も早く鍵を入手し
家に帰り
風呂にはいる
これしかない！

そんなことを考えていると
「チリン」
っという音がした
「おっ、この音は」
といいながら探すと
鍵があった
「やっと見つけたこのままじゃ、マジでやばかった」
っといい自転車で帰ろうとするまで
約1．5秒

ただいま自分黒宮白刃は
競輪選手もびっくりな速さで

家に帰っています
そして家の前の十字路を渡った瞬間それがおこった

・・・・・・・・トラックが突っ込んできた
結果、衝突＝自分死亡の方程式がたったとき
・・・トラックが止まった
よく見ると運転手も口を大きくあけたまま
止まっている
「なんじゃ、こりゃあ！」
っといった矢先
「いやぁーまいったねぇーミスしちまった」
いかにもフヌケタ声が聞こえた

第2話　死亡フラグ（後書き）

感想、指摘など気軽にしてください

第3話　電波さん登場！？

「いやぁーまいったねぇーミスしちまった」
俺は目が点になっていた、理由は
１　時間が止まっている
２　深夜の２時に１４歳にも満たない少女が目の前にいる
３　浮いている

「な、な、なんなのお前？」
「ん？私か？私はシェラ、、、神だ」
（電波さんか、まあいいや）
「えーとシェラさんかできたらいまの現状を教えてくれないか？」
「ん、いいだろう今お前が死にそうなところを私が気まぐれに助けたところだ」
「気まぐれかよ！」
「はぁー、にしてもやっちまったなぁー」
なにか困っているようだがここで聞くとめんどくさいことになりそうなので黙っていると
「あっそうだおいお前私の頼みを聞いてくれないか？」
「どんな？」
「一緒に違う世界についてきてくれ」
あーはいはい
「紙は持っているか？今から腕のいい精神科の医者をおしえてやるから、しっかり覚えておけよ」
「あはははは、おもしろいこと言うなお前まあお前の意見は関係ないとりあえずいくぞ
、、、、今すぐ」
「あっ、おい待て」
その瞬間目の前が真っ白になった

第3話　電波さん登場！？（後書き）

これからすこしずつ
長く書いていくつもりです

第4話　えっ夢じゃないの！？

起きたら森の中だった
「えっ、なにこれ？」
自分の状況を思い返してみた
（俺は公園から帰ろうとしていて
トラックにはねられそうになり
そこで電波さん登場！
そんで見事な電波ぷりっを見せてもらい
精神科を紹介してやろうとして
いきなり目の前が真っ白になって）
「ここどこ？」

そう疑問に思ったそのとき
草むらのほうから音がした
「がさがさ」
（うわぁー、なんかいるよ
また死亡フラグたちそうだよ
最近はなんだ
死亡フラグキャンペーンか？）
自分の不幸を嘆いていると音の主が現れた
狼だった、それも特大サイズの
全長2メートルはあるだろう
（ほらたった、また死亡フラグたったよ）
そんなことを考えた時、頭のなかで声が聞こえた
「やっほー元気ー、いきなり災難だねぇー」
（ふざけてる絶対こいつの仕業だ）
「ちがうよぉー」
（心を読みやがった！）

（まあいいや、どうせ夢だろう）
そう思った時、頬に風が通った
「痛っ」
触ってみると、血がついていた
「これは夢じゃないよぉー」
また聞こえた、ちょっとまて
痛い？夢なのに？
「だから、夢じゃないよ現実だよぉー」
えっ、マジで？

第5話　神様のお礼

「ウオォォォォォーン」
狼が吠えた、どうやら
さっきの風も狼がやったようだ
「おいおい、マジかよ完璧に死亡フラグたったよ」
「大丈夫、大丈夫、君にはこんなところまできてもらったんだから、ちゃんとお礼はしてあるよ」
「どんなのだよ！ちゃんと使えるやつだよな！この状況を打開するには狼たおすしかないんだぞ」
そんなに簡単なことじゃない、狼はあの正体不明の風が使えてでかいわりには、速そうだ
「それじゃあ説明してあげよう、まず君の能力は全て上げておいた、たとえば筋力これは上げる前がＥだったとして今の君はＢ＋だ」
「ふむふむ」
うなずいていると、狼がめちゃくちゃなスピードで突っ込んできた
「うぉ！あぶねぇー」
「今避けられたのも君の視力があがっているからだよ」

狼も避けられるとは思ってもおらず、少し慎重な動きになった
「じゃあ、もう一つ特別に君にプレゼントをあげよう」
「おっ、なんだ？」
「これだよ」
そういって目の前に現れたのは・・・・・・木の棒
「こんなもので勝てるかぁー！」
つっこみをいれていると、また狼が突っ込んできた、さっきとは段違いの速さで
「大丈夫だよ以外に頑丈にしてあるから」
（信じられねぇー）

第5話　神様のお礼（後書き）

話がなかなか進まなくてすいません

第6話　初戦

突っ込んできた狼は時々、残像が見えるくらいまで速くなった
（まだ速くなるのかよ、ちょっとやばいぞ、だいたいこの木の棒本当に頑丈なんだろーな）
狼はさっきからあの風は使ってこない
「やるなら今しかないな」
体制を立て直し次の攻撃に備えながら、様子を伺う
その時また狼が突っ込んできた今度はさらに速い
「きた！」
白刃は今、剣道の試合並みの集中をしている
突っ込んできた狼の頭にカウンターを喰らわせてやろうと思い構える
その時、狼が急に止まった完璧に先を読まれ体制が崩れるその時を待っていたかというように
狼が飛びかかってきた
（やばい！喰われる）

その時浮かんできたのは叔父との試合だった、その時もこんな感じだった
叔父にカウンターを喰らわせてやろうとして避けられた、体制が崩れ試合に負けたその後叔父にこう言われた
「動きが単純すぎる、あの状況なら緊急回避でもしてみろ！バカたれ」
その時は頭が回らずそんなことは思ってもいなかった

（けれど今ならできる）
すかさず崩れた体制の思うままにして回避した、回避して立ち上がり狼の頭に棒を叩きつけた
「キャン！」

といいそのまま狼は倒れ込んだ、同時に俺も倒れた

第6話　初戦（後書き）

戦闘シーンがうまく書けません
アドバイスお願いします

第7話　説明（1）

今度起きたら湖の前だった、周りをきょろきょろしていると、なんだか久しぶりに聞いた気がするうっとうしい声が聞こえた
「起きたぁー？」
「あー、起きましたよつーかお前なんかなれなれしくない」
「そうかぁーいやぁー元気そうでなによりだぁ、連れてきていきなり死ぬのは後味悪いしねぇー」
なにごともなかったように話だした神様（？）
（まあいいや）
「ところであんた、姿は見せねーの？」
「見せないよぉー今出ていったら確実に殴られそうだし」
「殴りはしないけどストレスは溜まっているな」
「でしょぉー」
「それはまた今度にして、とりあえず話を進めてくれ」
いつになっても話がすすめないのにだんだん、いらいらしてきたからここら辺で打ち出してみた
「そうだねぇー、そろそろはなしますかねぇー、さてどこから話したもんかねぇー」
ねぇーねぇーねぇーねぇーうろさいなと思いながら我慢していた
「じゃあ、まずここにくることになった理由を教えよう」
あいつの話によるといまこの世界では未曾有の大災害がおきてしまい人口が著しく減ってしまい
そのためモンスターや魔物がはびこってしまいそれを解決するために俺を連れてきたらしい
「でっ、お前のミスってなに？」
「あ～、それはねぇーモンスターを増やしちゃったんだよ」
「はぁ？」
「だからぁー増やしちゃったんだよ、モンスターを！」

あいつによると自分の担当する仕事がモンスターに関係するものらしく
上司に災害のことを聞いたのが丁度モンスターを増やしたあとだったらしい
「なるほど、つまりそのモンスターを減らすのを手伝ってくれと？」
「そうそう、わかってるじゃん」

第8話　説明（2）

無責任かつ適当だな、と思いつつ心の中では笑っていた
（俺の長年の望みが叶った、よっしゃあぁぁー）
と喜んだ後に一つの疑問が上がった、そもそもなんで俺なんだ？他の奴でもいいはずだ
「なぁ、なんで俺なんだ？」
「なんでって、君は昔そんなような願いを言ってたじゃん」
（うん？そういえば昔、中三の時にそんなような願いをした記憶がある）
「えっ、ちょっと待てということは神様（？）には願いが聞こえるのか？」
まだこいつが本当に神様かわからないので疑問系だ
「なんで疑問系なの！神様だって言ってるじゃん」
頬を真っ赤にしてふくれている
（あぶねぇーときめくとこだった）
ふぅ、と息をついて話題を戻した
「でっ、どうなんだ？」
納得がいかなそうだが諦めて話だした
「うーん、確か特定の願いは聞こえるようになっていたと思う」
（なるほど、ということは俺が願ったものはその特定の願いなのか）

「それでどんな災害だったんだ？」
これからこの世界に住むのだからある程度の知識はなきゃいけない
「えーとね、最初は地震でその後に火山噴火でしょ、その後は謎のモンスター大発生！」
「謎のモンスター？」
「今の環境に適応したモンスターだよ」

第8話　説明（2）　（後書き）

更新が遅れて申し訳ありませんでした
またこのようなことがあるかもしれませんがなにとぞ
ご理解いただくようお願いします

第9話　説明（3）

説明が苦手なのかとてもおおざっぱな説明をされた
「もうちょいくわしく」
「え～とね、たとえば火が嫌いなモンスターが災害の影響で進化して火に強くなるみたいなの」
「ふーん、ん？そういえばさっきの狼は？」
「そんなの君の隣にいるじゃん」
「えっ」
そう言っ隣を見ると
（なんじゃ？）
「しゃ、しゃべった」
（なにを驚いておる、わしはもう1万を超えておるのじゃぞ言葉ぐらいしゃべれるわ）
今気づいたが頭に直接話していたようだ

「それで？あんたがくれた俺の能力のくわしい［ここ強調］説明をくれ」
「う～んとねこの世界にはギルドというものがあるんだ、そこでカードが作られるんだけどそこのだと筋力、魔力、体力、知力、神力があるんだけど君はすべてB＋以上になっている一般の冒険者はC＋いっていればいいところだよ」
「ふーんつまるところ俺はわけだ」
」まーね、君ならそのうちAにでもいきそうだね」
すこし冗談じみた笑みを浮かべていった

（さっきから聞いておったが何をいっておるのじゃ？）
いままでしゃべらなかった狼がまたしゃべった
「そういえばきみ名前は？」

「わしに名前はない、できればおぬしつけてくれぬか？」

第１０話　名前

（名前か、どんなのがいいんだろう）
そしてもう一度狼をじっくり見てみた、目はエメラルドのように綺麗で、毛は灰色というより白にちかくて、黒い線が２本左右に入っている
「ちなみに性別は？」
（メスじゃが）
「じゃあ＜ラル＞で」
そう言った後、ラルが光った
「なんだ？」
光がやんだ光からでてきたのはエメラルドの目をした美女だった
「誰？」
「たった今名前を付けたばかりじゃろうが」
半分あきれ顔の美女が言った
「ラルか？」
そう言った時完全に光がやんだ、全身が見えた、言葉のとうりの意味で
「んなーーーーー！？」
そんな声が森に響きわたった
「ふ、ふ、服は！？」
「ないの」
あっさり言ったこうしちゃいれないと思った白刃は
「おい！神様なんでもいいから服を着せてやってくれ、今すぐに」
大事件だった、危なかった、俺は高校生だよあんなものを見て冷静でいられるわけがない、あの後神様が服を着せてくれたが後１秒遅かったら俺はまちがいなく気絶していた
「なさけないのー」

「なさけないねぇー」
二人からばかにされた
「もういいだろ、それでラル自己紹介してくれよ」

第１１話　自己紹介ｐａｒｔ２

「ふむ、そうじゃのうなにから話たものか、まずわしは神獣種、風の精霊の祝福を得たウインドウルフじゃ」
「神獣？風の精霊？」
よくわからない単語がでてきた
「あー神獣ていうのはね、精霊の祝福を受けてなおかつ世界に８匹しかいないんだよ」
「ふーん、精霊は？」
「精霊は火、風、雷、土、水、氷、闇、光をつかさどる者たちのこと君の世界では天使って言ったかな」
そんなにすごいものなのかと関心していると疑問が浮かんだ
「なんでラルはこんなとこにいるんだ？つーか個々どこ？」
「個々はギミア大陸のスジアの森じゃが、わしはここに住むどるからなんでと言われてものう」
なんでは失礼かすまんと謝り、なんでさっきいきなり人になったのか聞いた
「それはお主と契約したからじゃ」
「契約？」
また知らない単語だ、今度もシェラが教えてくれた（いつまでも神様はやめろと言われた）
「契約とはそのとうりの意味で賢獣や神獣と契約をかわしいっしょにいることをいうのだよー」
「なるほど、でもさっきの質問の答えにはなってないな、続きを教えてくれ」
「ふむ、通常賢獣と契約をしても人にはなれないだがわしら神獣は別ものでの、契約を交わすとなんでか人になれるのじゃ」

第１２話　契約

話を聞いた後、俺はこう思っていた
（いいかげんだぁー！）

まぁそれは置いといて
「ラルは俺と契約を交わすとどうなるんだ？」
「さっき言ったとうり、基本契約を交わした者は一緒に旅をしたりコンビを組む者もおるの」
「ふーん、でもなんでラルは俺と契約を交わしたんだ？」
それがさっきから気になっていたものだ
「それはの、お主がわしより強かったからじゃ、わしはいままで自分より強い者に会ったことがなかったのじゃ、だからお主に興味がわいての」

「なるほど、じゃあいつまでもこんなところにいるわけにもいかないしそろそろ行くかねぇー」
「行くにしてもどこに行くのじゃ？」
そうだった俺は今どこにいるのかもわからなかったんだぞどこに行くにも道がわからない
「じゃあ途中までの道は教えてあげようじゃないかー」
シェラが助け船を出してくれた
「じゃあとりあえずー、一番近くてギルドのある町に教えてあげよう」

話によるとここから町まで少なくとも３０キロはあるらしい、その話を聞いたラルが
「じゃあわしが連れていってやろう」
と言った風の精霊に祝福を受けたのだから１時間もせずに着くじゃ

ろう、といとも簡単に言った

第１３話　盗賊と遭遇

実際、半信半疑だったラルに乗り走り始めて１０分時速２００キロはあると思われる減速なしのノンストップドライブをしている、ラルは気持ちよさそうに快走をしている、俺はというと
「オエェェェ！」
ゲ〇を吐いていた、、、。
ラルはそんなことを気にもせず爆走している
俺はその数分後、意識がなくなった、、、。

起きたのは突然だったいきなり前の方から爆発があったのだ
「なんだ？」
その疑問に答えたのはラルだった
「盗賊じゃな」
前を見てみるといかにも盗賊ですね、と言える奴等が２０人ちかく居た
村でもあるのか？と思い周りを見るがなにもないすると盗賊の前に何があるのかがわかった、、、馬車だ
「人はいるのか？」
とラルに聞くするとラルは
「先ほどの爆発で５人いた商人らしき者と３人いた冒険者は馬車から投げ飛ばされ盗賊によって殺されてしもうた」
と残念そうに言った
それを聞いた白刃はすさまじい殺気が溢れ出していた
「そいつぁー少しお灸を添えてやらなきゃなぁー」
そう言った瞬間白刃いなくなり、全力で盗賊めがけて走っていた

第１３話　盗賊と遭遇（後書き）

少し下品かと思ったので〇をつけておきました

第１４話　怒りは我を忘れる（前書き）

残酷なところがあります注意してください

第１４話　怒りは我を忘れる

白刃は昔いじめを受けていた理由は親がいないからであるしかし白刃はいじめを受けていた時一度だけ反撃したことがある、その時のことは覚えていないらしいだがその反撃された子供たちは二日意識が戻らなかったそうだ

白刃は１００メートル程の距離を5秒ぐらいで走ったこの時は考えなかったが後から考えるとシェラからもらったものだときずいた、そして盗賊の前に立った

「なんだてめぇーどこから現れた！」

リーダーらしき人が言った

「そんなことどうでもいいだろ、俺はただあんた達を殺しにきたんだからよぉー」

「たった一人でなにができんだよガーー」

他の盗賊が言い終える前に白刃はそいつの首に蹴りを射れた、、、おそらく即死だろう

「な、なにしやがっーー」

次も言い終える前までに頭を地面にたたきつけた、地面が真っ赤に染まった

リーダーらしき奴がいち早く正気にもどり指示をだした

「せ、旋回しろ！こいつ速いぞ」

言っている間も白刃は戦闘を続ける、バキッ、ボキッ、ゴキン、メキッ、などの骨が砕かれる音が聞こえる

「うわぁぁぁー！助けてくーー」

悲鳴をあげる時間も作らせず殺していく

次々と殺していく中で逃げる奴も出始めた、そんな奴も逃がす前に殺した

第１５話　後始末

最後の一人はあのリーダーみたいな奴だ、近ずくと
「ま、ま、待ってくれ助けーー」
よけいなことを言う前にこいつも殺した、周りをみるとどこもかしこも死体だらけだ
「こいつらどうしよう？」
そんなことを言うとラルがきた
「大丈夫か、お主があそこまで強いとは思わんだ」
そんなに酷かったのだろうかと思うと、顔にでていたのかラルが言った
「あれはまるで鬼神のようじゃった」
「鬼神？」
またまた知らない単語がでた
「鬼神とは伝説上の最強の冒険者じゃ、本当に居たかは解らぬが誰でも知っている話じゃろう」

そんな話を続けている間に地面に穴を掘った
「なにをするのじゃ？」
ラルが聞いてくる
「亡くなった人を伴ってやるんだ、このままじゃかわいそうだからな」
そう言って作業に戻りそれが終わるまでラルはさしゃべらなかった
盗賊は道の端に置いておき、ついでに剣を一本拝借しておいた
「さーて、じゃあもうひとっ走りするかねぇー、あっでもほどほどにしてくれなほどほどに」
ちゃんと抑えて走るのを言っておいた
「そうじゃのもう一っ走りするかの」

そう言った後、俺はラルの背中に乗った、地獄が待っているのも知らず、、、。

第１５話　後始末（後書き）

できれば感想お願いします

第１６話　魔法初挑戦

出発から1時間経過した、町はもうすぐそこだが時間がもう夜なので町の１キロ前あたりで野宿することにした
「まさか、あそこからあんなめにあはされるとは」
後悔してもたりない悔やみが全身をかけ回る、ラルには今狩りにいってきてもらっている
「時間は今、８時ってところか」

シェラとは、あの後別れた、もし用があればむこうからくるらしい暇なのでためしに魔法でも使ってみようかと思いなんとなくイメージしてみる、魔法のやり方はある程度シェラに教わった基本的には詠唱しなければならないらしいが俺にはその必要はないらしい
（手のひらに炎を出すイメージ）
するとバカでかい炎の塊が頭の上に現れた
（やばっ！）
魔力が多いがゆえに調節をまちがえた、まずいと思い急いで魔力を１０分の１程に減らす、するとやっと手のひらに収まるほどまで小さくなった
魔力の調節をこれからしっかり覚えようと固く決意した

それから5分後ラルが鹿らしきものをくわえて帰ってきた
「なにそれ？」
「これはの、グルズといはれる鹿じゃ」
人型になり答えた
「もう鹿でいいじゃん」
「まぁ、お主がそれでいいならそれでよい」
そう言い、鹿を焼き美味しくいただいた

第１６話　魔法初挑戦（後書き）

もう１作書くかもしれないので更新が遅れるかもしれません

第17話　町の前まできた

夕飯を食べた後は白刃のくわしい事情を話た、それにラルは
「ますます興味が湧いたぞ」
と目をきらきらさせていた
そんな事をしながら明日の予定を話し合い今日は寝た

朝の7時、俺は目がさめたラルは狼の状態で寝ている、俺が起きたのに気がついたのかラルも目を覚ました
「んぅーーおはようじゃ、シラハ」
昨晩名前で呼ぶように言っておいた
「おはようラル、ぐっすり眠れたかい？」
朝の挨拶を返して、質問には「まあまあじゃ」と答えてきた
朝食にはラルが知っている食べれる草を食べた、感想は
（まずーー！？）
ここまで苦いとは思ってもおらず激苦の朝食は地獄だった

8時町の鐘がなり門らしきものも開いた（1キロ離れていても普通に聞こえたし見れた）
「よーし、じゃあのんびり歩いていくかな」
「ん、歩くのか？」
「朝からあんなスピードにはついていけない」
そう言いかるく吐きそうなのを我慢して出発した

町の前の門に到着した、身分証明がないのでおとなしく順番を守っている、ちなみにラルは狼であるギルドには賢獣として登録する予定である
すると前から門番らしき人がきた
「この賢獣はあなたのものか？」

「そうですよ」
「悪いが一緒にきてくれ」

第１８話　事情聴取！？

門番らしき人についていくと部屋に案内された
「さて、なんでつれてこられているか知っているか？」
「いいえ、俺なにかしましたか？」
突然言われた言葉にとりあえず否定しておく
「ここにくる間に盗賊に会わなかったか？」
「ああ、あれか、えっちょっと待って俺悪いことしたか」
なんで事情聴取されてんの俺と少し不安になった
「いや、別に悪いことじゃないんだがなんせまったく状況が解らなくてな、目撃情報によると黒髪の変な服を着た冒険者らしき人が盗賊をボコボコにして殺して去っていったという情報が入っていてな、それが今、お前がここにいる理由だ」
「用はなにがあったか話をすればいいんだな」
「そういうことだ」
納得した白刃はその時のことについて話した

「なるほど、そんなことがあったのか」
話終えた白刃は少し疲れた顔をしていた
「よし、わかったお疲れさんついでに入町審査もやってやるよまず名前を言ってくれ」
そんなこんなで入町審査が始まった

審査が終わると門番にこう言われた
「ギルドには連絡がいっているからもう話わしなくていいぜ、後俺の名前はセニアだわからないことがあったらいつでもきな」
「おう、またくるわ」
そして歩きだした

第１８話　事情聴取！？（後書き）

最近忙しくて更新できませんでしたすみません

第１９話　迷子の達人

（時間は１２時っとところか）
そんなことを思っていると
「ぐぅぅー」という音が聞こえた
「さすがに腹減ったなぁ、朝から激苦の草に、事情聴取だからなぁー」
（シラハ腹が減ったのか？）
ラルが話かけてきたちなみにラルは事情聴取のときには寝ていた
「そうだよぉー」
（ふむ、返答するのはよいが心で言ってくれ、周りから変な目で視られるぞ）
それもそうだと思い周りを視たが誰も気にしていなかった
また歩きだしたがここであることに気づいた
（俺どこに向かってんの）
（それはギルドじゃろう）
（だからそのギルドはどこにあんの！？）
（そんなことに今ごろ気づくとはのぅ、さっき聞いておけばよかったじゃろう）
「つーか、ここどこ！？いつのまにか裏道入っちゃったよー」
（シラハは迷子の達人じゃのう）

その３時間後やっとギルドに到着した
「おまちしておりました、シラハ様でございますね、こちらへどうぞ」
ギルドの職員が出迎えてくれた、そのまま部屋に案内された
少々おまちくださいと言って職員は出ていった、その３分後７０はいっているだろうと思われる爺さんが現れた、爺さんはくるやいなやこう言った

「なんじゃこの、まっくろくろ〇けは」

第１９話　迷子の達人（後書き）

新たにもう一つ小説を書いたのでよかったら読んでみてください
なんとか二つとも同時にやっていこうと思います
応援よろしくおねがいします

第２０話　不幸（前書き）

投稿がひじょーうに遅れてしまいもうしわけありませんでした

第２０話　不幸

「なんじゃこのまっくろくろ〇けは」
入ってきて第一声がジ〇リも代表作のあの『となりのトト〇』のお化けだった
「いんの！まっくろくろ〇けいんの！」
「うるさい！黙れ！まっくろ小僧静かにせんか！」
怒られたしかも今度はまっくろ小僧言われた

「でっとりあえずなんで俺はここによばれたんですか？」
気を取り直して本題に入った
「わかっておるじゃろう、盗賊のことじゃ目撃情報だけじゃ信憑性がないんでの」
「失礼しましたー」
わずか４分ぐらいの滞在に終止符を打ち部屋を出ようとドアに向かう
「ま、またんか、なんじゃいきなり」
「だってさっき散々話たのにまたあの長ったらしい説明をするのめんどくさいんですもん」
「わ、わかったとりあえずその話はおいといてよい」
「それじゃ他に何の用があるんですか？」
正直一刻も早く部屋から出たい気持ちをおさえて再度部屋に入る
「報酬についてじゃ、小僧おまえがなにをしたかわかっておるか？」
「ただの大虐さｔー、盗賊退治」
一瞬虐殺というだいそれたことを言いそうになったがなんとかぎりぎりのところで回避した
「そうじゃ、盗賊退治じゃしかしそんじゃそこらの盗賊とはわけがちがうＢランク相当の盗賊じゃぞ」

第21話　ギルドマスター

「しかもそれを1人でやったというのだからのう、まったくいったい何者なんじゃお主？」
「何者かと言われてもなー軽く無理やり連れてこられたただの日本男児なんだけど」
「？、ニ、二ホン？なんじゃそれ？」
おっそういえばここは異世界だったないけない、いけない
「なんでもねーよ。とにかく俺はただの人間の黒宮白刃だ」
「ふむ、シラハとな、変な名前だがどこかで聞いたことがある名前じゃな、はてなんじゃったかなー？」
「ちなみにあんたなんて名前なんだ？」
「あんたではない、クランだクラン・デバイスただしお主に呼び捨てにされるのは威厳がないからギルドマスターでよい」
いまなにか聞き捨てならぬことときいた白刃は。
「はっ？いまなんて？」
「ギルドマスター」
「はーーーー！？つことはなんだ俺はいままで上司になるかもしれない人にこんな態度をとっていたと？」
「なんじゃ？お主まだギルド登録しておらんかったのか？なにをそんなに驚いておるのだ？」
（あれ？なにも言われないもしかして、なにも問題ないむしろノープログレム？）
ちなみに白刃の英語の成績は地を這うが如しだったことは負の遺産だ
「まあなんでもよい、とりあえず、、、落とし前、、、つけてもらおうかのう」

第２２話　やる気の問題！！

『突然ですが問題です今、白刃はどこに居るでしょうか！！』
１とある山の頂上
２とある秘境の中
３とある洞窟の中の魔物１００体狩り！！
正解は、、、３
なぜ白刃がここに居るかというとギルドマスターの言う落とし前をつけにきたのだ

「まったくいくらなんでも魔物１００狩りはないだろギルドマスターの話によるとあんまり強くないらしいがめんどいな～」
「いいんじゃなにか～シラハは魔物を退治するためにここに来たんじゃろ？」
ラルは人になっています
「それもそうなんだけどなー、つーかあれなに？定番のゴブリン？」
「しかも何体もいるのーまっがんばれのー」
「ちょっラルやる気なしかよ！少しはやる気をみせよーぜ！」
そう言い終える前にラルは狼に戻り寝ていた
「あ～も～しょうがね～なやるか」
そう言ってこの前盗賊から拝借した剣を構えたゴブリンも殺る気と受け取ったのか奇声をあげた
「キシャーーーっ！！」
「おりゃ！！」

奇声をあげたのと同時に白刃が動いた
ドサドサドサドサっと物が落ちる音がしたと思うとゴブリンが十分の一程が崩れおちていた。より正確には一瞬でゴブリンを１０体程亡き者にしていた、だがひるむ間もなくゴブリンが次々と襲いかか

ってきた
「ん、、、もう終わったのか？シラハ？」
「まだだよ！早く帰りたいならてつだってくれてもいいんじゃないか？」
そう言ってまた一匹、一匹と切り倒していく

「しょうがないのぉ～シラハは、帰ったらなにかおごってもらうからの？」
「お～やる気になってくれたか」
シュパンっとものすごい風がおこった
「うむ、では、、、帰るぞシラハ」
遅れてゴブリンが倒れてきた、、、
「お、おう」
（絶対におこらせないようにしよう、うん）

第２３話　ランク（前書き）

おくれて申し訳ありませんでした。

第２３話　ランク

ところかわってギルドマスターの部屋、現在シラハはギルドマスターに報告をしているわけだが・・・

「いったいお主は何者なんじゃ？討伐を頼んでから2時間程しかたってないぞ、てっきり2日は帰ってこないとおもっておったのに」

帰ってくるなりギルドマスターの愚痴を聞かされていた白刃本人は校長先生の無駄に長い話を聞いているようでうんざりしているわけなのか半分聞き流していた

１５分後

「ところでお主のギルドカードが出来たぞ」

やっと長ったらしい愚痴が終了し本題に入った

「お主はきわめて異例な存在なのでランクをどうするか悩んだのだが、先ほどの結果を見る限りまったく問題ないことが証明された、よってお主のランクは『C＋ランク』じゃ」

（『C＋ランク』ってすごいのか？あんまよくわかんないな）

（あの程度の盗賊でBランクじゃから強、中、弱でいうと中くらいじゃないか）

「なんじゃ、まさかC＋ランクがどれだけすごいかわかっとらんな！？C＋ランクというのはな・・・・」

それから３０分後

「というわけだからなC＋ランクというのはすごいのじゃ！！」

現在、白刃は絶賛爆睡中

とても熱く語っていたギルドマスターは爆睡中の白刃など放って３０分も話したのに息切れすらしていない、何ともパワフルな老人であるっという評価を付けたラルだった。

「ふがっ、う～ん、おっやっと終わった？」
白刃が寝ていたことに今気付いたギルドマスターは・・・
「おい、おいおいおいなんじゃその態度はさっきは上司だのなんだの言っておったのに、もうちょっとうやまえーー！！」
（このパワフル爺さん元気だなー）
（さっきからこんな調子でずっと話しておったぞ、それよりはやくなにかくわせろ～）
「話を聞け～小童！！」

第２３話　ランク（後書き）

次の更新はできるだけはやくやろうと思います

第２４話　これが俺が望んだ非日常だぁ！！

色々あって今はギルドの宿舎に入っている、ギルドではＣランク以上のランカーには宿舎が与えられる。ラルもここで一緒に寝るらしい。（※ランカーとはギルドに登録している者を指す）

そこで白刃は唖然としていた。

事の発端は２０分前にさかのぼる・・・

「それでシラハおごりの件はどうしたんじゃ？」

ギルドマスターから金貨２枚と銀貨２０枚（※金貨１枚＝１００万、銀貨１枚＝１万、銅貨１枚＝１０００円）を貰った白刃はさっそくルームサービス的なもので注文をした。注文したのはソーニャという鳥の丸焼きとフォングという猪の串焼きだった。

「おい、なんだこのでかさは」

目の前にあるのはソーニャの丸焼きその量は重さにしておよそ５？とても１人で食べられるものではないそれをラルは・・・

「これしかないのか・・・たりるかのぅ・・・」

「こんだけあんのに、まだ足りんのか！！」

ギルドマスターからの報酬は残り金貨２枚と銀貨５枚

「日本円にして約１５万の食事どんだけ　豪快なお奉行だよ・・・」

ちなみにラルの事はギルドマスターに説明した、説明と言ってもラルの人間の姿を見せた。その時のギルドマスターは腰を抜かして目が回ったような顔をしていた。ラルもランカーとして登録をすると同時に極めて異例の賢獣としても登録することにした。ランクは白刃と同じのＣ＋だ。

時間はおよそ夜の１１時落とし前やらなんやらですっかり時間がなくなったので町は明日行くことになりその日は寝た。

しかし日付が変わった午前１時白刃が寝ていたベッドにうごめく

影が忍び寄る、その影は白刃が寝ているベッドに倒れ込んだ
「うっ、う～ん、なんだ？」
「むみゃむみゃ、シ～ラ～ハ～もう食べられない～～。」
そんな仕草をしたラルに白刃の反応は・・・
「これだ、これなんだ、これが俺が望んでいた非日常なんだよ」
白刃はその時自分はなんて幸せなんだろうっと本気で思ったらしい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2587x/

アンノウン・ワールド

2012年1月12日23時45分発行